

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：33908

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K02319

研究課題名（和文）移民集住地区における日系ブラジル人の教育戦略 - 世代・階層の違いに着目して

研究課題名（英文）Educational Strategies of Japanese-Brazilians in Immigrant Settlement Areas:
Focusing on differences in generation and class

研究代表者

三浦 綾希子 (Miura, Akiko)

中京大学・教養教育研究院・准教授

研究者番号：90720615

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、移民集住地区に暮らす南米系移民の教育戦略の多様性を世代と階層の違いに着目して分析することを目的とした。対象地域においてフィールドワークを実施し、子どもを日本の学校/ブラジル学校に通わせている保護者、日本の学校/ブラジル学校の教員、教会やNPO団体のスタッフ、行政職員等に対して調査を行った。

その結果、世代や階層によって南米系移民の教育戦略は分節化しつつあること、また、対象地域は移民の教育支援制度が整っている場である一方、「過度な」集住によりスティグマ化された場でもあるが、こうした場の両義的な構造が移民の親の教育戦略に影響を及ぼすことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、既存研究において看過されがちであった移民集団内部における教育戦略の多様性について移民コミュニティとの関係性から明らかにした。移民の教育戦略を分析するための新たな枠組みを提示した点において本研究は学術的意義を有する。

さらに、対象地域には多くの移民が集住しているがゆえに、かれらの教育戦略を一枚岩的に理解する傾向が強かったが、移民集団内部の教育戦略の多様性を明らかにすることによって、それぞれに必要な教育支援のありようを提示した本研究は社会的意義も有している。

研究成果の概要（英文）：This study aims to analyze the diversity of educational strategies among South American immigrants living in the immigrant community, focusing on generation and class. Fieldwork was conducted in the community, and surveys were administered to parents who send their children to Japanese schools/Brazilian schools, teachers in Japanese schools/Brazilian schools, staff of churches and non-profit organizations, and government officials. The results show that the educational strategies of South American immigrants are increasingly segmented by generation and class. Furthermore, it was found that the region is simultaneously a locale with a robust educational support system for immigrants and a place that is stigmatized by what is perceived as an "excessive" concentration of immigrants. This ambivalent structure has been found to influence the educational strategies of immigrant parents.

研究分野：教育社会学

キーワード：南米系移民 移民集住地区 教育戦略 世代 階層

1. 研究開始当初の背景

1970年代末から増加傾向にあったニューカマーと呼ばれる新来移民は、1990年の改正出入国管理及び難民認定法(以下、入管法)の施行以降急増し、その定住化が指摘されるようになった。それに伴って、教育社会学やその関連領域においては、ニューカマーを対象に家族の教育戦略や子どもの学校不適応、学力不振、進学問題について多くの研究が蓄積されてきた。これらの研究によって、日本の学校文化や教育制度の問題点が浮き彫りとなってきている。

一方、1990年の改正入管法の施行から30年経った現在において、ニューカマー外国人はもはや「新しく来た人」という枠組みでは捉えることができず、移民と呼ぶべき存在となっている。さらにその長期定住化に伴い、エスニシティの多様化及び移民集団内部の多様化が指摘されるようになってきている。特に注目すべきは、階層化や世代の進行といった新たな変化が移民集団内部の多様化を生み出しているという点である。従来、移民は経済的に不安定で子どもの教育に十分な関心を払う余裕がない人々として捉えられてきたが、近年では正社員として就労し、経済的な安定を得る層なども出現してきている。また、日本生まれ日本育ち、あるいは学齢期を日本で過ごした移民二世が壮年期を迎え、結婚、出産を経て三世を育てる時期に差し掛かってきている。

これらの点を踏まえ、移民集団内部で進む階層化や二世による次世代形成のありように関する研究が徐々に行われ始めている(三浦 2016, 樋口・稲葉 2018, 額賀 2019, 児島 2020)。特に移民の階層化に関わる研究では、移民二世の教育達成が分岐しつつあることを背景に、親の学歴や生活の安定、家庭外の社会関係がその分岐に関わっていることが指摘されており、興味深い(樋口・稲葉 2018, 額賀 2019)。しかしながら、一方で残されている課題もある。教育社会学においては、出身階層と子どもの教育達成をつなぐ重要な要因として家族の教育戦略があることが指摘されてきたが(片岡 2001)、移民の教育達成と階層に関わる研究においては、この家族の教育戦略の違いについては分析がなされていない。そのため、親の階層と子どもの教育達成が直接的に結びついているかのように描かれ、子どもの教育に関する親の主体性が看過されている。

この点を補うためには、階層と教育戦略の関係性について目を向けた上で、教育戦略を行う親の主体性も描き出すことが重要となってくる。さらに、階層化は、世代の進行という新たな事象を伴って進んでおり、階層格差が世代を超えても固定されるという指摘もあることから、多様化する移民の教育戦略を分析するにあたっては、階層差と世代差による組み合わせが家族の教育戦略に及ぼす影響を及ぼしているか、多層的な分析を行う必要がある。

2. 研究の目的

以上を踏まえ、本研究では、移民集団内部の階層的、世代的差異が家族の教育戦略に及ぼす影響について分析する。分析にあたっては、家族の教育戦略に影響を与える外的要因にも目を向ける。具体的には、移民コミュニティ、学校、トランスナショナルなつながりが家族の教育戦略に与える影響について検討する。この3点は、家族の教育戦略に影響を与える要因として先行研究で指摘されているものである。特に移民コミュニティが家族の教育戦略に与える影響については、研究代表者が主著(三浦 2015)にて明らかにしている。ただし、三浦(2015)においては、移民コミュニティを一枚岩的に捉えていたことも否めない。階層による棲み分けや出身国と日本との間を行き来する者たちの新規移住/再移住による変化など、移民コミュニティ内部で展開するダイナミクスにも目を向ける必要がある。そこで本研究においては、移民コミュニティの動的変化が見えやすい移民集住地区である愛知県豊田市保見団地を対象とし分析を行う。具体的なリサーチクエスションは次の2点である。

世代、階層によって家族の教育戦略がどのように異なるのか。

家族の教育戦略を世代、階層による違いに着目して分析するが、その際、階層と密接に関わる言語能力(日本語・ポルトガル語)や親の学歴の違いにも目を向ける。また、家族の教育戦略を一枚岩的に捉えるのではなく、母親と父親の教育戦略の違いなど、家族内の立場の差異についても考慮しながら分析を進める。さらにひとり親家庭の場合とそうでない場合では教育戦略のあり方が異なることも予想されるため、家族構造の違いについても検討する。

移民コミュニティ、学校、トランスナショナルなつながりは家族の教育戦略にどのような影響を与えるのか。

移民コミュニティについては、既述した通り、その動的変化に目を向けながら分析を行う。調査対象地となる保見団地は5つの自治区に分かれており、上昇移動を果たした南米系移民たちは県営団地から緑苑という戸建てが多い自治区へと住居を移すことが多い。そして、その居住地の違いが南米系移民内部の教育戦略の違いを生み出している側面もある。さらに、学校との関わりにおいては保見団地にある公立学校、ブラジル学校の教育実践や教師の関与が家族の教育戦略に与える影響について分析する。最後に、トランスナショナルなつながりについてであるが、

南米系移民は出身国と日本との間を往還しながら生活を送っており、ブラジルの教育制度や親族ネットワークがかねらの教育戦略に影響を及ぼすことが先行研究から明らかになっている(志水他 2013)。本研究においてもこの点を重視するが、階層や世代によって出身国とのつながり方にも違いがあると考えられるため、こうした違いを考慮にいれながら分析を行う。

3. 研究の方法

保見団地に暮らす南米系移民保護者 34 名にアンケート調査、32 名に半構造化インタビューを実施した。また、対象地区にある公立中学校、ブラジル学校、NPO 団体、エスニック教会における参与観察ならびに教員・スタッフに対する半構造化インタビューも行った。さらに、保見団地に付与されるまなざしの変化を検討すべく、保見団地に移民が増加した 1990 年代から 2023 年までの間の新聞記事の分析を行った。加えて、豊田市における外国人施策の変遷についても整理し、行政職員へのインタビュー調査も実施した。

4. 研究成果

(1) 移民コミュニティの形成と変容

移民コミュニティの形成・変容過程を明らかにすべく、NPO 団体のスタッフ、学校の教員、行政職員等にインタビュー調査を行い、また新聞記事の分析も実施した。そして、その結果を 2023 年 6 月に開催された第 33 回年次大会のラウンドテーブルセッションで報告した(三浦・渋谷・山脇・芝野・中原 2023)。移民が増加した 1990 年代以降、生活上のマナーの問題や移民と日本人の対立が顕著になる中、対象地域には「危険な場所」というイメージが付与されるようになるが、こうした地域の現状を打破しようと、移民と日本人の交流や移民に対する日本語や学習支援が活発化していき、現在のような様々な支援制度が作られていったことが本研究の調査から明らかになった。

行政は複数のアクターの連携によって地域にある移民に関わる問題を把握し、共有しながら、必要な制度を立ち上げていた。さらに、制度を立ち上げて以降も継続するために複数のアクターによる点検と修正を行っていたが、こうした連携はアクター間が「顔の見える関係」でつながっていたために可能となっていた。また、地域に付与されるスティグマは学校にも付与されるが、対象地域にある学校は、国籍や使用言語にかかわらず、すべての子がわかるユニバーサル授業を軸とした学校づくりを通して学校に付与されるスティグマに抗おうとしていた。NPO は継続的な支援を 20 年以上にわたって実施してきたが、団地内の問題が変化する中で支援内容を柔軟に変えていった。対象地域には複数の NPO が活動しているが、移民がそれぞれのニーズにあった支援を選択することが可能となっていた。

(2) 南米系移民保護者の教育戦略の共通性と多様性

子どもを保見団地にある学習支援室に通わせている移民保護者 34 名に対しアンケート調査を行い、その後アンケート回答者の中から 11 名を抽出しインタビューを実施した。分析の結果、対象となった南米系移民保護者は全員が比較的高い教育意識を持っており、就労よりも教育を重視する傾向にあることが示された。特に重要なのは、教育を重視する語りが教育よりも就労を重視する他の南米系移民との差異化の中で強調されるという点である。出稼ぎのために来日した南米系移民の場合、就労中心の生活になり、子どもの教育には関心を向けられないという点が先行研究では繰り返し指摘されてきたが、本調査の対象者はそうした南米系移民と自らが同一視されることに抵抗を示す。そして、就労を重視し子どものことを考えない南米系移民からは距離を取ろうとし、反対に日本社会に適応しようとする姿勢をみせる。

こうした共通点がある一方、対象者の教育戦略には違いも確認できる。第一に、学歴が比較的高い層は子どもに対する具体的な将来展望をもち、日本での地位達成を見据えた教育戦略をとるのに対し、学歴が低い層においては教育に対する関心はもちつつもその教育戦略は具体性に欠けており、子どもの教育のために学校や NPO を積極的に活用する様子などもみられなかった。第二に、他者との関わりを極力断ち、個人の力で教育達成・地位達成を果たそうとするケースと、周りの移民家族と共に日本での教育達成・地位達成を志すケースでも違いがみられた。

教育戦略の共通性の背景には、歴史的に蓄積された保見団地への社会的なまなざしがある。南米系移民の増加以降、保見団地ではそこに暮らす南米系移民に対してスティグマ化されたまなざしが向けられてきた。こうしたまなざしを内面化した対象者たちは、「日本社会に適応しない南米系移民」と差異化をはかり、教育に力を入れていたといえる。一方、教育戦略の多様性には、制度的に完備された移民コミュニティの影響をみることができる。移民が少なく、制度が十分に整っていない場合、同国人同士のエスニックなつながりに依存せざるを得ず、相互扶助の中で同じような教育戦略をとるようになるが、さまざまな制度的が整っている対象地域のような移民コミュニティでは、それぞれの親が多様な制度を利用しながら独自の教育戦略をとるというのが可能となっていた。この研究成果については 2022 年 9 月に開催された第 74 回日本教育社会学会大会で共同報告を行った(三浦・芝野・大川 2022)。

(3) 第二世代の親の教育経験と教育戦略

保見団地で育ち、現在親となっている南米系移民第二世代 8 名に対して半構造化インタビューを実施した。対象者は全員 1990 年代から 2000 年代初めに保見団地で学齢期を過ごしている

が、かれらの学校経験は実に多様であることが調査から示された。日本の学校のみに通っていた者は8名中1名だけであり、ブラジル学校を転々としていた者、日本の学校とブラジル学校の両方に通っていた者、日本の学校とブラジル学校間の転校を繰り返した者、日伯を往還しながらホームスクーリングで育った者など多様な教育経験を有している。共通して特徴的なのは、将来を見据えた一貫性のある教育戦略のもとで育った者はほとんどおらず、その場その場の状況に応じた教育戦略のもとで学校教育を受けているという点である。背景には、日本の学校や地域の支援が十分でなかったことに加え、親たちの将来展望の不確定さや情報不足がある。つまり、利用できる教育資源が少なく、帰国の見通しも立たない中、場当たりの教育戦略をとらざるを得ない状況に第一世代たちは置かれていたのである。

このような教育経験をもつ二世世代の教育戦略はいくつかの点において共通性をもちつつも、多様であることが本研究では確認された。まず共通性としては、子どもの就学先として日本の学校を選択している点、工場労働を回避するための教育戦略がとられている点、母国が日本かの二者択一的でないアイデンティティを子どもに求めている点が挙げられる。その背景には、今回の調査対象者の多くが定住を志向していること、「南米系移民＝工場労働」というスティグマに抗おうという意識が高いこと、日本／ブラジル・ペルーどちらの社会にも依拠できない自らの経験があると考えられる。

他方、個人重視／つながり重視の教育戦略をとるかという点と、保見団地とのかかわり方という二つの点では違いがみられる。前者には自身の教育経験と現在の職業が関係しており、後者には保見団地に対する対象者の評価の違いが影響していた。以上の研究成果は、2023年9月に開催された第75回日本教育社会学会にて報告を行なった（大川・山脇・三浦 2023）。

（4）移民きょうだいにおける教育達成の分岐

保見団地に暮らす南米系移民母子家庭の5名（母親、第1子～第4子）を対象にインタビュー調査を実施し、4人きょうだいの間にみられる教育・職業達成の分岐の様相およびその背景要因について検討した。分析の結果、4人きょうだいの間には教育・職業達成をはじめ、言語獲得、学校経験、親子・友人を含む社会関係、宗教、エスニック・アイデンティティにおいても違いがあることが明らかになった。第1・2子はいずれも中学校を中退しており、日本語よりもポルトガル語を使用する傾向にあり、アイデンティティもブラジル人よりであった。一方、第3・4子の最終学歴はそれぞれ高卒、大卒であり、日本語もポルトガル語も両方習得しており、アイデンティティは日本人よりであった。

こうした違いがみられた背景には、来日時期、学齢時に家族が描いていた居住展望や保有していた資源、家族の安定性・凝集性、親の教育的関与、学校・地域環境の違いが大きく関わっていた。特に第4子の大学進学背景には、兄らが早期に離学・就職したことで家庭に経済的な安定性がもたらされたことや、きょうだいからかれらの経験に基づく指針や教訓、教育的支援が日常的に得られたこと、一家のキリスト教入信を通じて家族の凝集性が高まったこと、さらに学校教員から家庭背景の理解と進路・生活支援が得られ、今日に至るまで「何かあれば連絡できる」信頼関係が維持されていること、エスニック・コミュニティ内の社会関係を通じて大学進学に向けた具体的な道筋や奨学金の情報、ロールモデルが得られたことなどが関わっている。

第1～3子は、早期に学校を離学し就労したが、そうした決断は必ずしも自己犠牲を伴う悲観的なものであったわけではないことも強調しておきたい。家族を支える役割を担ったことや、在学中にほとんど感じる事ができなかった自己効力感を得たこと、進学とは異なる自己実現の道に出会ったこと、こうした経験抜きには得られなかった他者への共感的視点や人生を主体的に生きるマインドセットを得たことなど、教育達成とは別の次元で自身の人生に意味をもたらすものとしてかれらはこれまでの経験を捉えていた。この研究成果については2023年10月に開催された第96回日本社会学会で共同報告を実施した（金南・大川・山脇 2023）。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 藤浪海	4. 巻 19
2. 論文標題 越境する生活史と当事者支援 在伯ウチナンチュ・在日ブラジル人女性としての経験を読み解く	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 移民研究	6. 最初と最後の頁 63-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 渋谷努	4. 巻 42（2）
2. 論文標題 多文化に関わるフェスティバルの現状と課題 アンケート調査の結果をもとに	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 社会科学研究	6. 最初と最後の頁 185 - 218
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 芝野淳一	4. 巻 55
2. 論文標題 社会共創に向けた異文化間教育の展望：「聴くこと」を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 異文化間教育	6. 最初と最後の頁 74-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 金南咲季	4. 巻 20
2. 論文標題 ブラジル人学校の教育課題と地域との相互作用に関する基礎的研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 人間関係学研究	6. 最初と最後の頁 45-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 芝野淳一	4. 巻 27
2. 論文標題 新二世の帰還移住と「ホーム」の構築過程：グアムから日本に進学した大学生を事例に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 移民研究年報	6. 最初と最後の頁 19-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 清水睦美・根岸佐織・三浦綾希子	4. 巻 8
2. 論文標題 外国ルーツの児童生徒への教員のかかわり方の違いを探る 神奈川県A市の小中学校教員に対する質問紙調査から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本女子大学教職教育開発センター年報	6. 最初と最後の頁 19-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 芝野淳一	4. 巻 7
2. 論文標題 教条的ハイブリッド主義を超えて： 移動 する人々の帰属の経験を描くために	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 中京大学現代社会学部紀要	6. 最初と最後の頁 123-135
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18898/0002000021	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 芝野淳一	4. 巻 59
2. 論文標題 『移動』から異文化間教育研究を展開する：象徴的移動に着目して	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 異文化間教育	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大川ヘナン	4. 巻 28
2. 論文標題 母語継承の難しさ 在日外国人集住地域を事例に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 アメリカス研究	6. 最初と最後の頁 33-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 渋谷努	4. 巻 44
2. 論文標題 ワールドフェスティバルに見る多文化フェスティバルの変容と機能ー国際交流から多文化共生へ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 社会科学研究	6. 最初と最後の頁 179-212
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 三浦綾希子・芝野淳一・大川ヘナン
2. 発表標題 移民集住地区の教育戦略の多様性：南米移民の保護者を事例に
3. 学会等名 日本教育社会学会第74回学会大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大川ヘナン
2. 発表標題 言語・文化継承は選択可能なのか？ー在日外国人集住地域を事例にー
3. 学会等名 第27回天理大学アメリカス研究会年次大会シンポジウム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 芝野淳一
2. 発表標題 社会共創に向けた異文化間教育の展望：「聴くこと」を中心に
3. 学会等名 第42回異文化間教育学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 金南咲季
2. 発表標題 ブラジル人学校と地域の関係：混合研究法による現状分析
3. 学会等名 異文化間教育学会第42回大会・日本国際理解教育学会第30回研究大会合同大会（オンライン開催）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤浪海
2. 発表標題 コロナ禍で問い直されるフィールドワーカーの視野と前提 横浜市・川崎市臨海部に暮らす移民調査の経験から
3. 学会等名 関東社会学会2021年度第1回研究例会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 三浦綾希子・清水睦美・根岸佐織・柿本隆夫・篠原弘美
2. 発表標題 外国につながるのある児童への教師のかかわりの違いを探る 神奈川県A市の小学校教員に対する質問紙調査から
3. 学会等名 異文化間教育学会第42回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 三浦綾希子・渋谷努・山脇佳・芝野淳一・中原慧
2. 発表標題 制度的に完備された移民コミュニティはどのように作られるか？ 移民集住地域 / 保見団地における教育の側面に注目して
3. 学会等名 日本移民学会第33回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 渋谷努
2. 発表標題 保見団地における移民問題の形成史
3. 学会等名 日本移民学会第33回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 山脇佳
2. 発表標題 切れ目のない支援を目指して - 多様なアクターの連携による制度づくり
3. 学会等名 日本移民学会第33回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 芝野淳一
2. 発表標題 経験のなかで模索される移民の子どもへの支援 20年以上にわたるNPOの活動史から
3. 学会等名 日本移民学会第33回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 中原慧
2. 発表標題 経験のなかで模索される移民の子どもへの支援 20年以上にわたるNPOの活動史から
3. 学会等名 日本移民学会第33回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大川ヘナン・山脇佳・三浦綾希子
2. 発表標題 南米系移民二世代の教育戦略ー移民集住地区で育った親たちの子育て
3. 学会等名 日本教育社会学会第75回学会大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 金南咲季・大川ヘナン・山脇佳
2. 発表標題 移民きょうだいにおける教育達成の分岐：集住地区に暮らす日系ブラジル人家庭の4人きょうだいを事例に
3. 学会等名 日本社会学会第96回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Rennan Okawa
2. 発表標題 How Language Inheritance is Difficult in Japan -A Case Study of a Brazilian Community in Japan
3. 学会等名 Biennial Conference of the Japanese Studies Association of Australia 2023/ International Conference of the Network for Translingual Japanese (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Rennan Okawa
2. 発表標題 A realidade em que os jovens se encontram no Japao -Desafios nos estudos e nas carreiras
3. 学会等名 Associacao de Pesquisadores Brasileiros no Japao
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 藤浪海
2. 発表標題 移民研究とディアスポラという視点
3. 学会等名 日本移民学会第33回大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 Nobuhiko Nibe, Mari Nakamura, Hiroshi Yamaguchi	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 240
3. 書名 Toyota City in Transition	

1. 著者名 宮岡真央子・渋谷努・中村八重・金城系絵編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 266
3. 書名 日本で学ぶ文化人類学	

1. 著者名 芝野淳一	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 300
3. 書名 「グアム育ちの日本人」のエスノグラフィー：新二世のライフコースと日本をめぐる経験	

1. 著者名 清水睦美・児島明・角替弘規・額賀美紗子・三浦綾希子・坪田光平	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 695
3. 書名 日本社会の移民第二世代：エスニシティ間比較でとらえる「ニューカマー」の子どもたちの今	

1. 著者名 原田琢也・伊藤駿	4. 発行年 2024年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 284
3. 書名 インクルーシブな教育と社会：はじめて学ぶ人のための15章	

1. 著者名 文貞貴・山口恵子・小山弘美・山本薫子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 266
3. 書名 社会にひらく社会調査入門	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	芝野 淳一 (Shibano Junichi) (10758577)	中京大学・現代社会学部・准教授 (33908)	
研究分担者	渋谷 努 (Shibuya Tsutomu) (30312523)	中京大学・教養教育研究院・教授 (33908)	
研究分担者	金南 咲季 (Kinnan Saki) (80824979)	椋山女学園大学・人間関係学部・講師 (33906)	
研究分担者	藤浪 海 (Fujinami Kai) (90819947)	関東学院大学・社会学部・講師 (32704)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	中原 慧 (Nakahara Akira)		
研究協力者	大川 ヘナン (Okawa Rennan)		
研究協力者	山脇 佳 (Yamawaki Kei)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------